

71 泥棒の恩返し

ある貧乏な方がですね、子持ちの貧乏の方が、大晦日になってもお正月をやる何もないんでね。金持ちの家に泥棒に行つて。その金持ちの主人がいい人間であるわけよ。そういう、まあ、泥棒に行つて。その金持ちの主人は、これが入つて、こつちが寝るのを待つてですね、片一方にあれしているのを主人は見ているけど。また、この人は見ているから、寝て。

この泥棒が取ろうとしたら、泥棒にそういうことを言うたらしい。白ですね、白にね、この泥棒が帯を外して、この白に巻いてね。武器道具ですよ、包丁なんかですね、この白に刺したら、何も取れるようなね、そういう話をしたら、この泥棒はこれを信じて、武器もいろんなものあれしてね。そうしたらまた、主人は起きて、泥棒を呼んで、どういう事情できたか、事情を一々詳しく聞いてですね。まあ、実は家族が多くて食べ物に困っている。そういうことで泥棒に入つた

というあれでね。この主人は言つたそうです。

「そうか。何でも持つて行きなさい」と。たくさん何でもかんでも持たして。

後は成功して、この人に恩返ししたという話もありますかね。

字糸満 上原亀吉